

とになった。森山氏は若い頃、地元の鉱山労働者の問題にかかわって以来、次々と労働問題を手がけて、ついに国際労働の分野でも第一人者となつた。

ひたむきに一つの問題を掘り込み、徐々にその輪を広げていくという森山氏の手法は私の記者活動にも重要なヒントとなつた。記者の場合、何に興味を持つと、それを極めれば生活が成り立つのだが、政治家の場合、一道を極めても票になるどころか、むしろ不利このうえない。労政とか外交は政治の重大事であるにかかわらず、政治家が寄りつかないのはこのためだが、その労政を森山氏は一心不乱にやつてきた。その献身的な姿勢に私はかねがね敬意を払ってきた。

ここにでき上つた書物を森山氏が読むとすれば隔靴搔痒の感があるに違いない。森山氏自身が筆をとつて書けば、また別の森山氏が浮かび上つてきたかもしれない。人物論というものは、常にその人物の一面を語つているに過ぎない。森山氏自身が書いても、私が書いてもそれが“一面”であることにはならない。

この原稿は森山氏の生前にほとんどが出来上つていたが、多忙で、照れ屋の森山氏は途中までしか目を通さず、亡くなってしまった。残念至極である。この書を今は亡き「モリキンさん」に捧げる。

屋山太郎

一九八八年正月

第一章 廃虚の中での決断

戦後処理、そして復員

昭和二十年八月十五日正午、ラジオから天皇陛下の戦争終結のお言葉が流れた。約三百万人の陸海軍人、一般国民の生命が失われ、明治維新以来、幾多の困難を乗り越えて築きあげてきた近代日本の国力のすべてが崩壊して太平洋戦争は終つた。

その瞬間を森山はこう回想した。

「やはり泣きましたね。僕は外務省の人間。戦時中も折にふれては儀典課長の公邸などに集まつて、国際情勢や我が国の戦争遂行能力について、情報交換をしていました。また、近く天皇陛下から重大な発表があることも知っていた。しかし、現実にその日がくるとね。ただ青春の情熱を航空機の生産にかけていたのですから…」

この日、陸軍主計少尉・森山欽司は関東軍需管理局の置かれていた東京・千代田区の「東拓ビル」



出征の日。自宅の門前で(昭和16年)。

の一室で天皇陛下のお言葉をとめどない涙とともに聞いていた。「東拓ビル」は千代田区内幸町にあり、現在の東京電力本社あたりに位置していたという。

当時、森山は軍需省航空兵器総局に属して、航空機の製造に関するその資材の調達、配分を陸軍と海軍が個別に行なうことでによる無駄をはぶくため、これを一元的に取り扱うことの目的として設置された機関である。軍需省本体は、もともと霞が関(現在の会計検査院)にあったが、戦火が激しくなつたためその機能を各地に分散することになり、森山たち航空兵器総局はこの「東拓ビル」にオフィスを移していた。

森山はここで「負けるとはいえないが、勝てるとも思えない」(森山)戦いに、情熱を傾けていた。

そして終戦。だが森山には終戦、つまり敗北という歴史の大転換を目のあたりにして感慨にふけつたり、茫然とするひまはなかった。むしろ、この八月十五日からしばらくの間ほど多忙をきわめ

た時期もなかつたという。

「終戦の当日からか、その翌日からだつたかは記憶がはつきりしませんが、とにかく、直後から、大変な騒ぎになつたのです。僕は軍需省で航空機の機体、発動機の部品を担当していたのですが、すでに発注し、製造されてしまつたものについて、業者側から“金を払つてくれ”という要望がすぐについた。敗戦の直後から、もう支払いを待つ人たちの行列ができはじめ、ひどいときにはその列がビルの外に数百メートルもつながつてしまつてね。われわれとしても、もはや正規の見積りをとつて金額を算定するのは不可能だということで、すべて認定でやることにし、片つ端から払つていきました。中には“これから秩父の山にたてこもるから、金をなんとかしてくれ”なんていつてくるのもいましたが、これにも払つてあげた。当時の金で、総額にすると数千万円になつたでしょう。僕の人生の中で一番大金を扱つたんじゃないかな」

GHQ(連合国総司令部)が軍需生産の全面停止を指令するのは、こうした混乱がひとまず納まつた九月二日のことである。

軍需省での「戦後処理」に忙殺された約二週間が過ぎたあと、森山は九月一日に復員する。戦地での経験がなかつたとはいえ、一等兵として陸軍に入隊して以来の約四年間にわたる軍隊生活は、森山にさまざまな面で影響を与えた、その後の人生を大きく転換させるきっかけにもなつた。

復員した森山は、日ならずして外務省に戻る。森山は昭和十六年十月、外交官試験に合格し、卒業と一緒に外務省に入省したが、すぐ陸軍へ入隊したため、外交官としての経験はほとんどない。

ようやく本来の職場に帰った森山は、外務省の外局として設置されたばかりの終戦連絡中央事務局に配属となる。「ここは、占領軍が占領政策を遂行するために発する指令、覚書、具体的な文書に

よらない指示などを受けとり、日本政府側に伝達することを主な任務としていた。

つまり、占領軍の命令を国内に伝達することを主な任務としていた。

終戦連絡中央事務局の設置は八月二十六日。長官には当時、外務省調査局長てのちに外務大臣をつとめた岡崎勝男が任命された。森山が配属されたのは政治部政治課。政治部長は後日、政界に転身し社会党に属したのち民社党の結成に加わり、委員長となつた曾根益で、政治課長がのちの警察庁長官、柏村信雄である。

森山はこの政治課で連絡官をつとめた。内部での地位は上から数えて七番目だった。具体的な任務は、GHQが発する指令書等を受け取り、その中身を見て優先順位をつけたり、本人の段階で処理できるものを処理、それ以外のものは翻訳して上にあげるといったことが中心だった。

実は、この仕事に着いたことが、森山のその後の進路、決断にきわめて大きな意味を持つてくる。亡くなるまでの三十数年間にわたる森山の政治家としての活動の根本的な部分にも常に影響を与えて続けてきたといつていい。

「なにしろ、敗戦というものをこれ以上切実に感じるポジションもないからね。僕は占領というものを、まず文字で見たわけです。『隣組を廃止しろ』だとか『〇×大臣をクビにしろ』といった指令が毎日のようになる。つくづく、日本は負けたんだなあ、占領されたんだなあ、と感じました。と

同時に、このままでは日本はどうなるのか、われわれはなにをすればいいのか、といったことを毎日真剣に考えていましたよ」

そうした焦燥感、青年らしい使命感を胸に、森山たち外務省の若手官僚は、省内や、外務省からほど近い新橋駅前の粗末な飲み屋で毎晩のように議論した。メチール・アルコールによる失明の恐怖と闘いつつ酒をくみ交わし、日本の再建、占領政策の行方、そして自分たちの使命などについて、時たつのも忘れて話し合つた。

「勝者の増長と敗者の卑屈」——昭和二十年十二月十六日、自宅の寝室で青酸カリをあおつて自殺した近衛文麿公爵は連合軍の日本占領政策について遺書の中でこう述べた。その占領政策は最高、最強の権力者・ダグラス・マッカーサー連合国最高司令官が八月三十日、コーン・パイプを口に、厚木飛行場へ降り立つたときにはじまる。

日本の歴史上はじめての外国人による統治、占領。近衛公はその屈辱に耐え切れず自らの命を絶つたわけだが、占領軍と日本側との「接点」に位置することになつた森山が抱いた感情も、近衛公同様、占領とはかくも「過酷」なものかということだった。

「とにかく、きびしいものでしたよ。要するに占領政策、つまりポスト・ワー・ボリシーというのは日本を二度と足腰たたなくすることを目標にしたものですからね」

袖井林二郎の著書『マッカーサーの一〇〇〇〇日』によれば、昭和十九年十一月にアメリカの世論調査研究所が行なつた調査によると、アメリカ国民の一三%は戦争が終つたら、残つてゐる日本人

のすべてを殺すことを望んでいたという。

これは、戦争で両国民が現実に殺し合いを行なっている状態の中での調査。日本側も戦争のさ中にはアメリカやイギリスを「鬼畜米英」と呼んで憎悪をたぎらせていましたのだから米側の皆殺し論も不思議ではなかった。

互いに憎悪をぶつけ合った一方が勝者となり、一方が敗者となれば、占領政策が過酷なものとなるのは当然だった。今でこそ日米両国は同盟関係にあるが、第二次世界大戦が終結した時点でアメリカ側の日本に対する憎悪が一気に消えたわけではない。対ソ戦略の過程で、日本を味方につけた方が得という打算が、憎悪を薄めたのだ。

まだ戦いの余韻がさめやらぬ終戦直後の数年間は、文字通り米国は占領軍であり、日本人は被占領民族であった。

アメリカは敗戦後の日本を飢えから救い、民主的な国家につくりかえたが、その一方で「日本を二度と足腰たなくする」との思惑があつたことも忘れてはならない。

対日占領政策の変化

昭和二十年から二十二年にかけての占領政策は日本を徹底的につくり変えるものだった。民主主義国を建設するというアメリカ人的使命感と、一方で制裁を求める感情とが入り交り、それが過激な占領政策となつてほとばしった。東京裁判は制裁面を象徴するものだ。占領軍との接点にいた森山がその過酷さを人一倍感じ、反発したのも当然だった。

日本の占領政策を立案したのは、アメリカの「国務・陸・海三省調整委員会」である。占領政策の“憲法”ともいえる「降伏後における米国の初期の対日方針」も、この機関でまとめられた。終戦の約一年前からはじまつたこの委員会での作業の過程で、「方針」はたび重なる修正が加えられたが、その中で終始一貫、最大の目的として据えられていたのは「日本が再びアメリカおよび世界の平和と安全の脅威にならぬよう」にすることだった。言葉をかえれば、「日本を未来永劫、弱小国にとどめておく」ことだったのである。

九月六日、トルーマン大統領が承認した「降伏後における米国の初期の対日方針」は、「日本が再びアメリカおよび世界の平和と安全の脅威とならないよう保障すること。他国の権利を尊重し、国際連合憲章の理念原則に反映されているアメリカの目的を支持するような平和的な責任ある政府を終局的に設立すること」というものだった。

日本において「至上の権力者」だったマッカーサーは、この基本原則に立つて日本の“国造り”を開始したのである。

送られて日本を去るが、それまでの間、日本をバラバラにして組み換えるような大々的な改革を行した。憲法、ページ、農地改革、財閥解体、労組育成……。

国際情勢の変化とともに、その後変質していったものもあるが「これら改革が四十年たった今日の日本の土台になっている」というのが、森山の一貫した認識だった。

マッカーサーによる日本改造計画の基本のひとつになったのが八月三十日、マッカーサーが日本に向かう機中で、C・ホイットニー准将に口述した「日本の政治的改革」の諸項目だといわれている。

児島襄の著書『日本占領』によれば、その内容は、

「まず、軍事力の破壊、国民を代表する政府組織の確立、婦人の参政、政治犯の釈放、農民の解放、戦争犯罪人の処罰、自由な労働運動の保障、自由経済の促進、警察弾圧の排除、自由かつ責任ある新聞の育成、教育の自由化、政治権力の中央集中の排除……」などであった。

マッカーサーは、日本に乗り込むと同時にこの方針に沿って具体的な改革を開始した。十月十一日、就任のあいさつに訪れた幣原喜十郎首相に対し、当面の改革の柱として①婦人参政権 ②労働組合組織の育成 ③自由主義教育 ④秘密審問の濫用による恐怖組織の撤廃 ⑤経済の民主化――の五項目を指示している。

今日の日本からみると、これらの改革は民主主義体制を築くうえで極めて重要だったが、一方では教育にみられるように、改革に伴って生じたひずみも随所に噴出することになった。

占領軍によるこれらの急激で熱情的な改革は、当時の日本人に「日本はどうなってしまうのか」という大きな不安を抱かせたことも事実だ。

森山も、強い不安を抱いた一人だった。

「占領政策は徐々に変化していくましたが、当初は日本を二度と足腰たたなくすることが目標だったわけですから、われわれが不安を持つたのも当然でしょう。まず、日本の経済規模を昭和五年一九年の水準まで落す。次に、日本人の性根を変えなければいけないと、日本歴史、地理、修身の教科停止までやった。その代りに社会科という新しい学科が始まつたのです。昭和二十一年に憲法、二十二年に教育基本法、労働基準法、地方自治法と基本的な法律が次々に生まれた。これらの法律がすべて日本の弱体化という基本方針の下でつくられたことを認識することが重要なのです。たとえば地方自治法。指紋押なつ問題でもわかるように、この法律は中央の地方に対する指揮権がほとんどない。要するに当時の法律、改革の諸方針は力の分散、弱体化を狙いにしていたのです」

「マッカーサーの初期における占領政策の意図や、政策決定の過程を理解することは、その後に出てきた政治、行政の“ひずみ”を分析する上で極めて重要なだ。

よく知られているように、初期の占領政策の立案、実行の主体となつたのは、いわゆる「ニューディーラー」達である。彼等はアメリカ国内でさえ実現できなかつた自分たちの理想を、日本という絶好の“実験場”を使って具現化しようと考へていた。

彼らは、「経済所有を拡大し、労組を奨励し、目に見えて大きな企業を解体し“巨万の富を持つ大

悪人」を排除し、家族による農地所有を強化する」というニューディール政策を、日本で実行しようとした。

彼らの中には共産主義者も少なからず含まれていたという説がある。それが真実かどうかはわからないが、そう噂されたということ自体、諸改革が極めて社会主義色の濃いものだったことを物語る。

事実、国内の社会主義者や共産主義者は大いに元気づき、占領軍を「解放軍」と規定した。彼らは飢餓→労働不安→革命に至る戦略を真剣に練り上げ、明日にでも革命が実現できると考えた。日本の共産主義者たちはアメリカの最大の敵が共産主義であることを忘れ、自分たちの「応援団」であるかのごとき錯覚に陥った。

当時の占領政策の中に、彼らをそう思い込ませるような雰囲気があったからこそである。占領開始直後の過激な諸改革は、二十三年ごろを境に穩健な方向に転換する。しかし、憲法や教育基本法、地方自治法をはじめとする基本的な法律は、いまもこの占領初期の時代につくられたそのままのかたちで生き続けている。

その行き過ぎが健全な民主主義の発展を時として阻害しているのも事実である。

例えば労働運動だが、「マッカーサーの最も重要な経済改革は、労働組合を育てることだった」（シドニー・マイヤー著『日本占領』）といわれるほど労働組合の育成は、占領政策の中で大きな比重を占めていた。だが、その育成に血道をあげすぎた結果として、日本の労働運動は「民主的」な、

あるいは「経済主義」中心の労働運動というよりも、共産党の主導による過激な、政治運動の趣を呈するようになった。

この政治的労働運動は、昭和二十二年のいわゆる「二・一ゼネスト」によって頂点に達し、マッカーサーのスト中止指令によって挫折する。このあと、民間労組は徐々に「民主的」な労働運動へと変身を遂げるが、官公労、国労、日教組、自治労などは依然として「二・一ゼネスト」以前の労働運動のスタイルを追求しているかに見える。彼等は政府や使用者を敵と見なし、経営状態や財政事情はおかまないなしに闘争に明け暮れ、究極の目標を革命に置く。日本の官公労の労働運動は、西侧では全く異色のものだが、その根源は占領時代に端を発するといってよい。

『日本日記』の著者として有名なマーク・ゲインは、当時「シカゴ・サン」紙に、

「われわれは、本当に日本を民主化しようとしているのか？ それともアメリカを日本に輸出しようとしているのか？」という記事を書いた。現実には、それよりもさらに一步進めて「アメリカでさえ実現できなかつたニューディーラーたちの理想を輸出しようとしていた」というべきだろう。

占領、そして日本の社会の改革について、ほとんどの日本人は悔んではいない。民主主義の誕生を心から喜んでいる。だが、そのことが占領政策の全面的な肯定につながるわけではない。理想的な民主主義社会の構築という観点から、現実の政治を眺めると、そこには清算すべき占領政策の残滓がある。その残滓を指摘すれば「反動」のレッテルを貼られる風潮の中で、森山は勇敢に愚直にこれらの問題と取り組んできた。

森山は占領政策の持つ意図を明確に理解できる立場にいた。このことが、森山を政治に向かわせる動機となつた。と同時に彼が、戦後四十年以上経つた晩年になつてもなお、占領政策の清算をあきらめなかつた理由である。

外務省をとび出し、総選挙に出馬

占領政策が日本を急激に変えつつある中で、森山は昭和二十一年三月、外務省を退官した。翌四月十日に行われることになる戦後第一回目の総選挙に出馬するためだ。

森山は外交官としての夢を捨て、政治家への道を歩みはじめた理由についてこう語つた。

「厳しいポスト・ワー・ポリシーの中で、日本がどうなつてしまふのか、いつ独立できるのか、われわれの未来がどうなるのかといったことが皆日わからない。当時、外務省では幹部候補生の若い事務官たちによる事務官会議というものがあり、僕も含めて二十代後半の血氣盛んな連中が、この会議の場などを中心に『日本再建のために、われわれはどうすべきか、なにができるのか、いったい、こうすることをしていていいのか』といった議論を、熱心にやつていた。もう連日、侃々諤々でね。そうした議論を重ねている中で、ひとつ一つの解答としてててきたのが、いつまでも役人をやつているのではなく、外務省を飛び出して、政治家として国民の中へ入り込み、日本再建のために働くべきだというものだった。僕は『そうだ、そうだ』とばかり駆け出してね。ふと後を振り向いてみたら、だれもついてこなかつたというだけの話なのですよ。当時は、どこでだれがなにをしてい

るのかわからない時代でした。いまから考えると若気の至りですよ。かりにいま、僕が外務省にいて、大使あたりになつたとすれば、それを辞めて選挙に出ろといわれても出ないね』

森山が政界入りしたのは敗戦という現実の中で、一刻も早く祖国を再建したい、そのためには政治家になるのが最も意義があると判断したからに他ならない。森山はおそらく、自分が政治家に向いているかどうかなどと考える余裕さえなかつただろう。森山は政治家にありがちな変り身の早さ、妥協的性格を持ち合わせていない。その代り、つねに原理原則を重視し、信念を容易に曲げない特質を備えていた。ときには「頑固もの」と評されるが、それを捨てれば、彼は並の政治家になつてしまふ。森山は最後まで並みの政治家になることを拒み通した。異色であることは時として周囲との間に摩擦を起こす。調和や協調を重視する日本の社会では損な役まわりを演じさせられることは少くない。

だが、そうしたことがすべてわかつたうえで、なおかつ森山は自分を周囲に合わせよつとはしなかつた。それがマイナスに働くことを承知しながら自分を貫き通した結果、森山は自民党の中で徐々に独特的の『存在感』を持つようになる。

森山は政界への転身について「若気の至り」、「今ならともそん度胸はない」と語るのが常だつたが、青春時代の血氣と度胸に自ら驚き、かつ満足しているようにもみえた。

森山は占領政策の行方、それによって方向づけられる日本の将来に大きな不安を抱き、官僚組織の歯車の一つとしてよりも、もっと大きな力を發揮したかったのだ。



外務省入省時の記念写真。前列、左から二人目が森山。

「外務省などという組織の中に入っていることについて、なにか反発のようなものを感じてもいたのです。僕は軍隊に行っていたんですが、軍隊というところは階級がひとつ上だというだけで、それこそ全人格的な位まで上だと考えられていた社会ですよね。『上官の命令は朕の命令だと思え』といふように。ところが、終戦のとき、すべての価値観が破壊された状況の中で、階級の高かつた人が見苦しい行動をとる反面、階級の低い人でも端然とし、非常に立派な態度を示すといった場面に、少なからず出会ったわけです。

復員して外務省へ戻ったのですが、こういう状態を見てきただけに、軍隊と同じではないにしても、やはりひとつの組織であり、次官、局長がいて部長、課長という具合に階級が存在するわけです。もう一度世の中がひっくりかえったら、この上司たちはどういう振る舞いをするだろうか、尊敬するに足る態度を示すだろうかと考えたとき、階級が上だから人格まで上だという確信が持ち得なかつたのです。要するに一種の偶像破壊というか……。これも外務省を辞める気になつた付随的な理由ですね」

もともと森山の血筋は政治に無縁ではない。森山の父、邦雄は東京で鳩山一郎法律事務所に所属する弁護士だったが、昭和三年の第一回普通選挙で栃木県から立候補、約四百票という僅少差で次点に泣いた経験がある。森山の体内には、政治指向の強かった父親の血が、濃く流れていたのではないか。

これについて森山は、

「僕が出たのは昭和二十一年。おやじがトライしてから二十年近く経っていますから、直接はつながらないでしょう。でも、その精神は僕の体の中に宿つていたかもしれませんね」

といつていた。

外務省時代の仲間は森山の転身をこうみる。

戦後、森山たちは軍隊から外務省に復帰したわけだが、彼らを待ち受けた仕事は、書類綴じや占領軍からの指令書の受け渡しといった、いわば雑用ばかりだった。一刻も早く日本再建を、それも自分たちの手でと血を燃やす若者にとっては全くあたりない場所だった。

外務省は外交官試験に合格して入省してきた新人を、まず二年間外国の大学へ留学させそこでみっちり外國語の訓練を受けさせる。これが終つたところで、はじめて実務につかせるのが習わしだった。

ところが森山たちの場合、戦局はすでに風雲急をつけるときであつたため、外務省に入省したとたんに軍隊へとられた。戦後外務省に戻つても被占領国であるから、外交らしいものはない。結局雑務ばかりやらされるハメになつた。

彼らはそれぞれに軍隊で、かなり重要な任務をまかされ、精一杯働いて

きた。そして終戦。「今度は外務省に帰つて、祖国の再建のために働く」という希望と使命感を持って戻つてみると雑用ばかりの毎日……。森山たちがある種の失望感、焦燥感を味わつたとしても無理はなかつた。

森山のかつての同僚の一人はいう。

「森山君なんか、特に気性が激しいほうだから、そう感じたんじゃないかな」

いすれにしろ、森山は将来の大天使への夢を捨て、祖国再建への熱い思いを胸に、父の出身地であり、約二十年前に父が挑戦し涙を飲んだ栃木県から戦後第一回目の総選挙に出馬する。弱冠二十九歳だった。

外務省・陸軍の同期生として

最高裁判所判事 外務省同期生 高島 益郎

君は、昭和十六年十二月、僕達同期生三十人の一人として外務省に入りました。君を含めて同期生の大部分は、翌年早々陸軍か海軍のいずれかに召集されましたが、君と僕は、陸軍に召集され、その後偶然にも、主計将校としてともに東京で勤務することになりました。

こうして、君と僕は、外務省の同期生として、戦時中、よく会い、よく語る機会に恵まれました。僕が君を友人として知るようになり、その人柄を敬愛するようになったのは、この時期です。正義感に溢れ、誠実で、一徹な人柄は、その頃から生涯変わることがありませんでした。

終戦後、君が外務省をやめて、政治を志すようになった経緯はよく知りませんが、当時占領中だった日本で、国事を憂え、血氣にはやる君が敢えて外務省のキャリアーを断念した気持ちちは、分かるような気がします。

君は、政治家として輝かしい業績を残されました。政治の道を選んだことに、君は満足だったことだと思います。しかし、君が最初に選んだ外交の道に、君はなにがしかの郷愁を抱き続けていたのではないでしょうか。君が、外務省を戦後早くやめたにもかかわらず、多忙を極める政界にありながら、クラス会には必ず出席して、僕達との歓談を楽しみにしていたことは、その何よりの証拠です。また、冗談でしうが、よく「僕を大使にしらえんか」などと僕達を困らせたこともあります。

君は、また僕達クラスメートが勤務している外国で僕達に会うこと無上の楽しみとしていました。同期生は殆ど全部、君とそれぞれの任地での会合を楽しみました。

このように、君は、僕達にとってかけがえのない同期生なのです。その同期生も、今までに外務省のそれぞれの仕事を終わり、いわば第二の人生を送っています。しかし、君は現役で、これからもまだまだ政界で活躍し、そのような君をクラス会で迎えることを楽しみにしていたのに、その楽しみも、一瞬にして消え去りました。

「人生古より誰か死なからん」という天文祥のことばは、われわれに、生死の問題だけにとらわれてはならないことを教えてくれます。「生」の中身が問題だということです。君は、七十年の人生をひたすら国事のために燃え尽くしました。この七十年の人生は、中身の極めて充実した人生だったことだと思います。このことに、君は、何の悔いもないはずです。

第二章 「まじめ少年」の青春

森山欽司の誕生

森山欽司は大正六年一月十日、現在の東京都千代田区麹町で、弁護士・森山邦雄の長男として生まれた。兄弟は二人。弟の雅司は森山が昭和二十一年に政治の世界へ飛び込んで以来、その政治生活を常に裏から支え続けた。

その雅司は兄・欽司に先がけることわずか一ヵ月余の六十二年三月二十八日に肝不全のためこの世を去了。雅司は森山の蔭となり、四十年間にわたって縁の下の力持ちをつとめてきた。この書をまとめるに当たって森山の多彩な足跡をたどる際、膨大、克明な資料を提供してくれたのも雅司である。

雅司は大正九年五月二十八日生まれ。森山とは三歳半、学年にして四年違いである。麹町小学校、府立第一中学校までは森山と同じルートを歩んだが、その後慶應の予科に進み、在学中、予備学生